地元力発見！㉗

佐藤建吉　「洸楓座」代表

人間を取り巻く〈四つの「間」〉について

――その2「フーテンの寅さん」の場合

『男はつらいよ』が描く「世間」

現代人が持つべき重要な認識は「地球の持続可能性」である。それは、いずれ「宇宙の持続可能性」と呼ばれるかもしれない。「宇宙」に目を向けるのは、「地球」を捨てて新天地としての棲み処を「宇宙」に求めようとする短絡志向が隠されているのだろう……。が、地球を捨ててはならない、また粗末にしてはならない。同じく、私たちの暮らしの場である「世間」を軽視してはならない。世間は、社会と類似の概念であるが、両者には違いがあり、それを問い議論する学会に「日本世間学会」がある。筆者も会員であり、「社会受容性における世間の関わり」と題して、風力発電の社会受容性について論考した。エネルギーの問題は、私たちの暮らしに密接であるからである。同時に、地球を守る「空間」ばかりでなく「時間」や「人間」も守るためでもある。

確かに、「世間」は、私たちの暮らしの場である。ここでの「私たち」は人間である。東京の下町の路地に生きる猫たちを、写真家・岩合光昭は写真に収めた。猫にも世間がある。こうして世間は人間のものばかりではない。人間の世間に焦点を当てると、渥美清が扮した「寅さん」（映画『男はつらいよ』）は、その象徴として相応しいのではないかと思う。

寅さん（寅次郎）の場合、彼が人情を持ち得たのは下町、すなわち帝釈天のお膝元の柴又であった。共に生きて暮らす、さくら、おばちゃん、おいちゃん、タコ、御前様……など、周りの人びとの関わりによって、まさに「間」（これは狭間ともとらえられる）によって獲得した思い出と生き様が、寅次郎の人格を形成させた。彼は、特徴である「人情」を、帝釈天以外のほかの地にも広げた。その現場こそが世間であるが、義理や人情こそが、人間としての普遍性であるかを問うかのように。寅次郎は、啖呵を切る誇りをもった人物であり、義理と人情に裏打ちされた道義を持つ。それは、下町で獲得したものであった。

柴又駅前の寅さんの銅像

寅さんたちが生き生きとする「下町空間」

寅さんの映画では毎回、マドンナが登場する。それは、神にも相応しいソンザイであり、寅次郎は下僕になってしまう。そのためには、寅次郎も人情を棄ててしまう局面もある。それは、自身の不完全性や不十分さを知ることになる。寅次郎のそうした局面は、『男はつらいよ』の題名のとおりであり、やがて帝釈天での産湯が懐かしくなり、その地、下町に帰ることになる。下町には、太陽にも相応しい異母妹のさくらがいる。その夫の博やその子で甥の満男がいる。この下町は、こうした人びと、つまり気心が知れた「人間」がおり、寅次郎が元気を取り戻すことが出来る「空間」であり、「世間」である。

寅次郎は各地に旅し、その地の「人間」と、その「世間」の間で、時代の変化や人間の奥深い生き方を、実体験する。「寅さん」の映画では、寅次郎自身も、弱い人間のときと強い人間のときの二面を見せ、多様な人間の表情や生き方を、物語として見せてくれる。それは《社会》の影響や関わりにもよる。例えば、印刷屋の支払いに苦労するタコ社長や受験勉強に悩む満男の姿は、《社会》による関わりであるが、映画に登場するシーンは、もっぱら「世間」としての身近な暮らしが描かれている。寅さんの映画『男はつらいよ』は、50作もがシリーズとして人情や人生を描いたのであった。1967年から2019年まで50年以上も日本の義理と人情を物語ってきた。いま、柴又の駅頭には、寅次郎とさくらの銅像が立っている。寅さんの映画は、自身の生き方として、東西南北に自由を信じ旅し、「時間と空間」そして「人間と世間」の、つまり《狭間》を生き抜く象徴としてみることが出来るのではないだろうか。

一方で《社会システム》として、《社会》の過誤により、自由とは反対の、制約と固定という環境を居場所として暮らすことを強いられた人物もいる。次回は、刑務所での暮らしを30年も強制された男と、その「気力」について述べたい。それはもう一つの「間」（「狭間」）の存在の認識と理解となるかもしれない。（to be continued）

1950年山形生まれ。東京都立大院卒。元千葉大大学院工学研究科准教授（金属疲労専攻）。金属疲労の研究のほか、他分野のテーマの研究開発に努めるとともに日本各地の地域おこし活動に従事する。ローカル鉄道と地元の酒蔵のコラボで地域再生を図る地酒「鐵の道」の製造・販売を企画、すでに10件を超える銘柄を送り出している。一般社団法人「洸楓座」代表。「全国ふるさと大使連絡会議」理事